

中国禅宗の現存歴史書の中でもっとも早く成立した楞伽師資記と伝法宝記の原典の諸写本比較校訂とその国訳および注記を本文とし、序文としてこれらの史書の成立事情、その間における中間の仏教一般や禅宗の動向などを、著者の永年にわたる研究によって、詳細綿密に叙述している。本書は通俗的な読み物であるとともに、専門的立場から見ても、従来にその例を見ない、もっとも学問的なすぐれた業績であるということが出来る。著者が同シリーズ禅の語録Iとして出した「達磨の語録」―二入四行論―(四十四年三月刊)とともに良参考書である。

A Primer of Sōtō Zen

A translation of Dōgen's Shōbōgenzo
Zuinonki by Reihō Masunaga East-
West Center Press-Honolulu 1971 pp. 119

本書は道元禅を西洋人に知らせるために、その入門的な「正法眼蔵随聞記」を英訳したものである。増永靈鳳教授が流布本によって英訳されたものをハワイ大学の東西文化センターの出版部から最近出されたものである。

以上 水野 弘元

今枝愛真著 中世禅宗史の研究

著者が東大史料編纂所の助教授で、本学講

師を兼ね、また『曹洞宗全書』の編纂員でもあることは周知の通りである。

すでに『禅宗の歴史』(至文堂刊)や『道元―その行動と思想』(評論社刊)などの著述もあり、これまで「主として中世禅林の成立発展と武家社会との関係について述べた論文のほか、さらに二、三の新研究を加えて全文を書き改めたもの」が、この本である。

(一)鎌倉仏教と禅宗の独立 (二)中世禅林機構の成立と展開 (三)中世禅林と武家社会の三章を、大きな柱としてまとめあげているが、特に曹洞教団については、この本の初めと終りの部分で取りあげている。

先ず第一章は、一一七五年、叡山の覚阿が楊岐派の禅を伝えて以来、南宋禅の諸派が相ついで伝えられたとし、当時、比叡山延暦寺のいわゆる「山門」と、三井寺や園城寺などのいわゆる「寺門」を中心としていた天台教団のなかにあって、自ら葉上流という台密の一流を創始した栄西が、シナに渡って南宋禅を将来し、天台教団からの脱皮を企てつつ、結局は、天台教学に禅をとり入れて内部からの改革をねらい「修正主義の立場を守りつづけた」あとかたを明かにしている。

ついで「道元教団の成立とその北越入山」をとりあげ、旧来の諸説を検討しながら、旧

大日房系の集団入門による勢力増強に、叡山が圧迫を加えたこと、また北越下向の直接動機が『護国正法義』撰述に対するアツレキがあったこと、更には藤原一門の庇護による東福寺の成立等の諸条件のあったことを挙げている。

注目すべきことは、高祖が仁治三年頃から大慧派を激しく批判し、また、これまでの在家仏教容認の布教態度が、北越下向にかけて「徹底した出家至上主義にかわっていったこと」を指摘している点である。かくして第一章には「清規の伝来と流布」の一節のほか、特に永明延寿の『宗鏡録』の流布の重要性和若干附記してまとめあげている。

次に第二章は、安国寺・利生塔の設立―中世禅林の官寺機構(五山・十刹・諸山の展開)―禅律方と鹿苑僧録―中世禅林における住持制度の諸問題―公文と官銭などの節を設け、官僚的色彩の強い宋朝禅が、鎌倉から室町期のわが禅林機構の上に、いかに政治的関連があったかをついている。

第三章でも、足利直義の等持寺創設―斯波義将の禅林に対する態度―足利義満の相国寺創建等にふれ、武家社会との関係を明かし、末尾の二節は、曹洞教団をとりあげ、永平寺系とは別派であった「曹洞宗宏智派」と

越前の豪族・朝倉氏との師檀關係にふれてい
る。

あとの一節では、永光寺や総持寺が北朝系
に属しながら、峨山禪師代になって、孤峯覺
明を介し、南朝から太祖に仏慈禪師等が下賜
されたイキサツにふれ、後世「十種勅問など
の偽文書が相ついでつくられるようになって
た」という史的究明は、多くの人の関心の的
となるだろう。

(昭和四十五年八月 東京大学出版会刊
A5判 五一六頁 写真一枚
索引 三二頁 二四〇〇円)

桜井 秀雄

逸見梅栄著 仏像の形式

仏像は礼拝崇敬の対象として造顕せられる
ものであり、仏教図像は仏教々理、信仰の変
遷発展を最も具体的に語る、仏教研究上きわ
めて貴重な資料である。

本学教授逸見梅栄博士は、夙にこの点に着
眼して研究を進められ、昭和十年、東洋文庫
から刊行された『印度に於ける礼拝像の形式
研究』は、斯学研究の標準的名著として迎え
られたのであるが、このたび博士はその蘊蓄
を傾けて『仏像の形式』を公にせられた。

本書はまず、緒言において、造像された諸

尊、および造像に関する典籍を説き、以下本
論を左のとおり編次する。

本論第一 像量編

一 印度の度量制 二 諸尊の俵量 三 尊像
の計量法

本論第二 像相編

一 仏身の妙相 二 菩薩以下の各探度像
三面相と造法 四 広臂と多足

本論第三 像威儀編—その一—

一 坐住勢 二 座 三 極東仏教国の座
四 乘

本論第四 像威儀編—その二—

一手印と契印 二 持物(契印)

本論第五 諸尊の色光編

一身色、身光、光背 二 極東像の光背
本論第六 身莊嚴—その一—
一如来衣 二 菩薩衣 三 甲冑形の諸天像

本論第七 身莊嚴—その二—

一 冠と髪 二 耳飾 三 頸飾と胸飾 四 腰
部以下の嚴身具 五 手足の嚴身具

これに付するに、本論第八造像料編と第九
像供養編を以てする。研究範囲をインドに限
定せず、中国、日本のほか広く仏教国全体に
わたり、仏教図像の変遷発展の諸相を精細に

論述された本文四五〇頁の本文と別刷図版四
十図から成る大著である。

およそ仏教美術の本質的研究は諸データの
綜合に俟たなければならぬが、本書の参照
資料の豊富さは六七六図に及ぶ貴重な説明図
からも窺われ、引証に至っては、漢訳経論の
ほか、サンスクリット、パーリ、チベット諸
文献を博搜されるなど、逸見先生以外の何人
もよく企及し得ないところである。まさに仏
教図像研究の集大成の観があり、仏教美術研
究者を裨益すること多大なるのみならず、ま
た仏像彫刻家の制作にも絶好の参考となるで
あろう。

従って、本書は単に通読して了るべきもの
でなく、研究者が机上に常備して参照すべき
性質のものである。それについて憾みとする
のは、索引を欠くことであって、何らかの機
会に、この仏教美術研究の宝库を開く秘鍵と
も云うべき索引が添えられるならば、後学の
欣喜これに過ぎるものはないであろう。

(昭和四十五年十月 株式会社東出版発行
本文B5判 四五〇頁 一巻・参考写真
集四十点 一巻)

木下 竜也